



# 陽光

Vol.13  
通巻 88 号

## ヒアリング・ヴォイシズを試行しています

ヒアリング・ヴォイシズ(以下、HV)は、下表のとおり、光風会の研修会等でその理念や活動内容を取り上げてきました。改めて簡単に言うと、精神医学で「幻聴」とされる症状に対して、きこえる体験をそのまま「HV＝声がきこえる」という言葉でとらえなおし、体験者の言葉を大事にしながらその体験への理解・対処・支援について学び、きこえる本人の自己理解と関係者の理解や視点の拡大をすすめようとする活動です。

オランダで始まったこの活動が「臨床心理学研究」に掲載され、同年日本で初めて岡山県でヒアリング・ヴォイシズ研究会が開催されました。この活動が2013年に日本テレビの「ザ！世界仰天ニュース 脳の不思議スペシャル！謎の音が聞こえる」で取り上げられました。今でもDailymotionで見ることが出来ます。違法アップロードかもしれませんが。

HVは“運動”であって、治療や訓練の技法ではありません。それゆえ、一法人のユーザーを対象に行うものではないと考え、光風会活動としての実践はしてきませんでした。しかし、考え方を変え、法人内部で試行することとしました。

近年の就労支援が強調される流れ中で、地域活動支援センター（以下「地活」）が余暇活動の場としてしか捉えられていない現状があります。存在意義が問われる「地活」を変えるきっかけになることを意図して、HVを始めました。個別給付の生活訓練や生活介護では、治療的・訓練的意味合いが強くなり、HVの本来的な“運動”の意味が弱くなると考えたからです。

「地活」として、2017年から「幻」という名称で、2019年4月からは「HV」の名称でミーティングを始めました。「幻聴」だけでなく、「視線恐怖」や「妄想」と言われる「症状」をもつユーザーも参加しています。ですから、“ヴォイシズ”という名称でいいのかも今後考えて行かなければなりません。これが試行である理由の一つです。

参加希望者で、前記のテレビ番組を見ることから始めました。現在5名のユーザーで活動しています。光風会登録ユーザーだけが対象ですので、“運動”とは言えません。登録ユーザー以外にどう働きかけるか。家族まで含めるのか。関係機関のスタッフまで広げるのか…。どこまでどのように広がっていくかが課題です。その意味でも試行なのです

(齋藤 悟)

表1 ヒアリング・ヴォイシズに係る光風会の地域交流啓発事業

年	内容
2002年	「頭の中のこえ」－ 幻聴を科学する － (朝田隆氏講演)
2003年	「ヒアリング・ヴォイシズ」 －聞こえる声とともに成長する道－ (佐藤和喜雄氏講演)
2004年	「幻聴の科学から『聞こえる声』の体験の共有へ」 (朝田隆氏・佐藤和喜雄氏・弘末明良氏によるパネルディスカッション)